

NEWSLETTER NO.15

日本NGO連携無償資金協力事業 アフガニスタン「ナンガルハール県・ ラグマン県コミュニティ防災力向上事 業 - 本邦研修開催」

今年1月に皆さんにご紹介したアフガニスタンにおける外務省NGO連携無償事業「コミュニティ防災能力向上事業」のアップデートです！本プログラムでは、①災害リスク評価の能力向上、②地図文化の醸成、③国家災害庁の中期戦略計画に反映させるための改善提案実施を3つの柱に活動しています。この5月までは主に①に集中して進めました。具体的には現地ステークホルダーの巻き込みおよびハザードマップ作成チームの編成、そして現地の災害情報や地図資料の収集を、パートナー団体であるCommunity World Service Asia と共に行いました。それらの情報を本プロジェクトパートナーである国土防災技術㈱の皆さんとも共有し本邦研修のコンテンツを作成しました。この間の本プロジェクトメンバーの協働の精神には非常に感激しました。



現場視察 上から、柿平地区（群馬県）水防倉庫（常総市）

特に5月31日に発生した首都カブールでのテロを受け在カブール日本大使館の機能が停止するなか、アフタガニスタンメンバー来日実現のために奔走して下さった外務省を始め関係者の皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本邦研修開始時には、カブールで駐在経験がごありの外務省民連室岡野恭子氏より、参加者に向けて日本政府としての期待やアフガン支援の心意気などのお話がありました。

研修は、正式な地図や自然災害についての学校教育がほぼ行われていないアフガニスタンで、彼らの祖国でどんな災害が起きているのか、また災害被害についての対策を共有することからはじめました。その後、日本の土砂災害への取り組み、



外務省民連室岡野恭子氏によるオープニングスピーチ

過去の土砂災害や洪水災害被災地への現場（群馬県・茨城県）視察、そしてハザードマップ作成に不可欠な等高線の読み方、GIS基盤図の作成方法、作成した基盤図を元にした地形判読、警戒地域設定手法演習、アフガニスタンでの導入計画の協議などを行いました。

今回本邦研修に参加した10名は様々なバックグラウンド（国家災害庁、コミュニティメンバー（専門：土木・農業・法律、地方政府）を持っていましたが、将来防災に関して積極的に関わっていききたいという思いを全員から強く感じました。質問がでない研修テーマはなく、最終日には一連のハザードマップ作成操作を復習できるまでになったキーメンバーもいたほどです。CWS Japanとしても、アフガニスタンの安全・安心に向けて今後のフォローアップに力を入れていく所存です。（文：プログラムオフィサー 阪口 佳恵）



左：警戒区域設定手法演習 右：地形立体模型

この研究会では、西田先生はじめ5名の研究者の方々がそれぞれ社会福祉学、法社会学、政治学の視点から戦後日本に向けて贈られた緊急支援であるララ物資について調査しておられました。

その一方で、同フォーラムの主催担当者として、自分の組織のルーツをたどるという目的意識でララ物資を調査した私の知見が果たして先生方の興味・関心を引くのだろうか？と、最初は大変疑問でした。ただ、ララ物資について、日本で入手できる史料は数量も大変限られているのと、また、どうしても、物資を受けた側としての情報が主になるため、偏りがありました。私が追っていたのは、CWS本部をはじめとする物資を送り出した北米の奉仕団体側のストーリーだったので、日本国内では入手が難しい情報でした。また、その情報源は全てキリスト教団体となると、ノンクリスチャンにとっては知り得ないルートをとる必要がありました。

6/24（土）に法政大学市ヶ谷キャンパスで開かれた研究会では、昨年フォーラムのために制作したララ物資紹介ビデオに続き、私が昨年行った調査内容についてプレゼンテーションさせていただきました。このように研究者の方々にララについてお話するのは初めてでしたが、思っていたとおり、かなり熱心に話を聞いて下さり、またマニアックな質問が多く、大変楽しい時間を過ごさせていただきました。



本邦研修参加者・スタッフ全員の写真

戦後福祉改革期研究会 （ララ物資研究会）に招かれて

昨年（2016年）11月に開催しましたララ70周年記念フォーラムにご来場いただいた立教大学コミュニティ福祉学部の西田先生から連絡を受け、大学の先生方にララ物資とCWSの関わりについてお話させていただく機会がありました。



調査資料を用いてのプレゼンテーション

今から思えばララ物資の歴史探求は常にワクワク楽しい発掘作業でしたし、情報を提供して下さった国内外の多くの方々との素晴らしい出会いもありました。ララやCWS草創期の史料はまだまだアメリカのどこかの公文書館に眠っています。去年は時間と資金不足のため調査を続けることができませんでしたが、将来もしも機会があれば、ララ物資を集めた北米側の調査を続けたいものです。

CWS Japanでは、これからもララ物資という100%一般市民によって支えられた緊急人道支援のストーリーを教会、学校、大学などに出かけ、お届けしたいと考えています。皆さんからのお問い合わせをお待ちしています。

(文：プログラムオフィサー 牧 由希子)

バンコク：Regional Humanitarian Partnership Forum 2017へ登壇しました！

6月7-8日、タイ・バンコクで行われたRegional Humanitarian Partnership Forum (RHPF)へ参加・登壇して参りました。RHPFは国連OCHAが主催し、人道支援に係る政府機関・国連機関・NGO・学術機関や軍等が参加するもので、アジア太平洋が抱える災害多発に対して全体としてどう向き合っていくのかを議論し、今後の指針をまとめる重要な会議です。

通常は2～3年に一回開かれるこの会議ですが、今回は世界人道サミット（2016年）後最初のRHPFという事で、アジア太平洋における今後の指針策定へ更に重要性が増した会議となりました。

登壇したセッションでは、アジア減災・災害対応ネットワーク（ADRRN）の事務局長としての発言もし、事前に災害リスクを軽減する為には様々なステークホルダーのパートナーシップが重要であり、その中でも特に現場のリーダー達が活躍できるような環境づくりを国際社会が一丸となって進める事が重要だとのメッセージを強調しました。

Localizationという言葉でよく表されたりしますが、防災・減災・災害対応が一番重要な「現場」において、その実践を主導する人たちがリーダーシップを発揮できる事が何よりも大事で、国際NGO・国連・ドナーなどの「外国人」はそのお手伝いをするという気持ちで丁度良いくらいです。

自分たちの未来は自分で変える、そんな自助の精神をとことんサポート出来る国際社会の体制に向けて、今後も現場主義で発信し続けます。

(文：事務局長 小美野 剛)



小グループでディスカッションのまとめを発表中